19世紀ロシヤ文学における「ユローヂヴィ」の形象について

鈴　木　淳　一

I

юродивый（ユローヂヴィ）（佯狂者）とは **юродство**（佯狂）を為す者の謂である。佯狂は，キリスト教における完徳達成のための苦行の一形態である。[1] 佯狂は無論，他の様々な苦行形態（例えば **затворничество, отщельничество** 等々）[2] とともにギリシャからもたらされたものだが，「他のいかなる国においても佯狂という苦行が古代ルーシほどに栄えた所はなく」，いつしかそれは「ロシヤ民衆の宗教の本質的一側面」[4] と呼ばれるまでにロシヤに浸透していったのである。宗教史家フェドートフの言葉を引用しておこう。

> ロシヤ教会暦中の「キリストゆえのユローヂヴィ（**Христа ради юродивые**）」あるいは「ブラジェンヌィ（**блаженный**）」の異常なまでの多さ，それに近年に到るまでの民衆の佯狂に対する深い崇拝とは，実際の所，キリスト教の苦行の一形態たる佯狂に，ロシヤの国民的性格を付与している。ユローヂヴィはロシヤ教会に不可欠の存在で，それは，ユローヂヴィの世俗化された形象たる馬鹿のイワン（**Иван-дурак**）がロシヤ民話に不可欠であるのと同様である。[5]

では，佯狂とはどんなものなのか。佯狂についての最も新しいと思われる文献の著者 A. パンチェンコに従えば，佯狂の本質は，受身的側面と能動的側面の２つに大別しうる。[6] 受身的側面とは，新約中の言葉（例えばマタイ：16—24，マルコ：8—34，コリントの信徒への手紙 I：4—9～13）に則った自

己卑下であり，狂気の擬装，肉体蔑視である。そして能動的側面とは，純粋に自らと対峙する受身的側面と異なり，世俗に生き，社会的礼節などおかまいなしに，時空を超えて，虚栄と倨傲にみちた世間に毒づく義務あるいは権利である。両者はパラドキシカルな補完関係にある。というのもユローヂヴィは，前者において個人的な完徳を追求すると同時に，後者では世俗の人々を救済するという社会的奉仕をも背負わされた存在だからである。彼は，裸同然の姿で街を徘徊し，施しだけを糧に戸外を住家とすることによって惹起される自然と世間の攻撃だけでは満足せず，進んで世間の人々に汚物を投げるなどの無礼を働くことによって，自らに対する誹謗，暴力を誘発さえするのだが，それは明らかに，自らをいばらの道ゆくイエスに重ねあわせた行為であり，個人的救済を目的としたものである。その時彼は，社会に生きながら，砂漠の苦行者のように孤独な存在である。だが彼は，同じ奇妙で突飛な風体，挙動によって，彼を嘲笑し，かつ殴りまでする人々，あるいは彼自身がそうするように誘惑した人々を啓蒙救済もしているのである。即ちそこには，彼の風体，挙動に罪深き愚行と低劣な肉体性を見る者は，「自分はこの世の知恵ある者だと考えている」（コリントの信徒への手紙Ⅰ：3—18）空虚で高慢な輩であり，一方「この世の知恵は，神の前では愚かなものだ」（同前：3－19）と心得ている人々はそこに自己を戒める教訓を見る，というパラドクスが介在しているのだ。

両者のパラドキシカルな関係で，もうひとつ見逃せないのは，個人的完徳にとって理想的言語が沈黙であるのに対し，沈黙によっては社会奉仕という機能が果たしえないという点である。彼は，自分のためのみならず，社会の啓蒙救済のためにも世間に毒づき，必要とあらば摘発から予言までしなければならないのである。彼の言説が，叫びやアフォリズム的フレーズといった短い形の，しかも曖昧模糊としたものであるのは，だから自然である。彼の言説は，世俗的にはあくまで沈黙に等しいものでなければならないのだ。そこから遂には，個人的な言語の創出という試みがなされるのも，自然の成行だと思われるが，そうなれば，彼の言語は時に意味のないもの（заумь）に化

してしまうこともあるだろう。「だが」――とパンチェンコは言う――「ユローヂヴィの言語は，主として身振り言語（язык жестов）である。＜略＞『身振り（жест）』の助けがあればこそ，原則的な沈黙とアッピールするような，とはつまり反応をあてこんだという意味だが，見物人との交流の間に横たわる矛盾も克服されていたのだ」。⑦ パンチェンコはこの後聖者伝とフォークロアを駆使して，上に引用した事実を演劇的観点から跡づけてゆくのだが，とりあえずここでは，ユローヂヴィの身振りもまた象徴的な読みかえによって言語化され，佯狂の能動的機能を果たしていたということを確認するに留めよう。⑧

もしロシヤ最初のユローヂヴィをキエフのペチェルスキー修道院のイサーキーだとしていいなら，⑨ 佯狂は11世紀に始まる。が，佯狂が盛んに行なわれるのは，15，16世紀を中心としたその前後2世紀である。佯狂は初め，受身的側面＝個人的完徳の要素が優勢であったが，16世紀に入ると能動的側面＝社会的奉仕の要素が前面に押し出されてゆくという。⑩ この佯狂の隆盛と変容は，佯狂もまたあらゆる文化現象と同様，歴史的条件に左右されるという事実から見れば，自明のように思える。コワレフスキーは次のように言っている。

> もしもこの苦行を純粋に精神的見地から見るならば，佯狂と精神的で理性的な存在としての人間の本性とは折合すことができる。その際，何よりも先ず考慮しなければならないのは，佯狂を自らに課したその人自身の個人的性格，それに福音書的精神と使徒たちの教えにその人がどれだけ触発され，その教えをどれだけ我物にしているかということである。そして次に考慮しなくてはならないのは，その時代のキリスト教社会の精神的レベルである。＜略＞またもしユローヂヴィの出現した時代に注意を払うなら，彼らの精神的行為の意義が益々明らかとなろう。ユローヂヴィの出現がその時代の社会的精神性に条件づけられていたこと，彼らの出現は大抵精神的凋落，精神的崩壊の時代，精神性の肯定的教えは

殆ど意味を持ちえず，否定的に行動しなければならない時代，精神的な理想が色褪せてしまった時代，背徳の排斥を通して美徳を教え，情欲を赤裸に発きたて，背徳の光景をつきつけることで美徳を教えなければならなかった時代であった，という歴史的事実を認めない訳にはゆかない。彼らの一見して奇妙な行為は，そうした点に向けられていたのである。この苦行は，個人的というよりもむしろ社会的である。（傍点は原文イタリック）[11]

詳しく論じる力も余裕も今はない。[12] ただ大雑把には，15～16世紀に佯狂が隆盛を極めるのは，ロシヤの中央集権化に伴って教会が政治権力の前に自立性を失い始め，イワン雷帝の時代には完全に屈服してしまうためだ，と先ずは言えるだろう。そして同時に，佯狂の隆盛という事態が，教会の弱体化＝信仰の危機に等しいとすれば，その時ユローヂヴィは，教会にかわって国家にキリスト教的真実を樹立すべく，自らの能動的側面を前面に押し出し，政治性を帯びてゆかざるをえなかったのではなかろうか。少なくとも，恐怖政治が確立されてゆく暗い16世紀の物言えぬ民衆の眼には，ユローヂヴィは何よりも社会の不正を撃ち，強者の悪徳を発きたてる自らの代弁者と映っていたことだろう。

いずれにしても佯狂は，17世紀になって西欧化を目指した文化の再編が始まるや，様々な形で規制されてゆく。そして17世紀中葉にニコンの宗教改革が行なわれ，18世紀初頭に到ってピョートル大帝によって西欧的近代化路線の延長上に宗務院が創設されるに及んで，佯狂は世間から消滅してしまうことになる。無論それは制度上のことである。現実には，17世紀には勿論，ユローヂヴィの列聖が中止された18世紀や19世紀にまでも，本物かどうかは別として，ユローヂヴィは数多くいたらしい。ニコンの宗教改革以来，ユローヂヴィがこぞって分離派に組し，分離派は佯狂を一種国民的旗幟のように擁護してゆくのだが，もしそうしたことも加味するならユローヂヴィの数は夥しいものとなろう。[13] まして，イワン雷帝に続いて即位したフョードル帝の時

代は勿論,[14] 西欧化が明確な形をとり始めるアレクセイ・ミハイロヴィチ帝の時代に到るまで，ユローヂヴィが宮廷に必要不可欠の存在であったとすれば,[15] 民間においては何をかいわんやである。そして，宮廷からユローヂヴィを叩き出し，断固たる態度で初めて佯狂に直接的弾圧を加えたピョートル大帝以降の時代にも，ユローヂヴィが民衆の記憶からも眼前からも消え去ることはなかったのである。[16]

フォークロアの世界にまで浸潤し，民衆に「神人（божий человек）」と呼ばれて尊敬されるユローヂヴィの存在を，文学が見逃す筈もなかった。西欧的近代化のひずみがそこかしこに顕在化し出す19世紀において，神の真理の求道者・体現者であると同時に，権力の摘発者たるユローヂヴィは，文学にとって，古き良き時代のシンボルとしてであれ，ラヂカルなプロテストの見本としてであれ，物言わぬ民の代弁者としてであれ，十二分に使用価値のある形象となりえたであろうからである。それはまた無論，ピョートルにとってそうであったように，文明化を妨げる無知蒙昧のシンボルとしても文学に登場しうるであろう。佯狂はその性質上，どうしても偽の佯狂を伴わざるを得ないのであってみれば尚更である。[17]

では具体的には，どのような作家がどんな作品でユローヂヴィを扱っているのか。ピエール・パスカルは，ロシア民衆の宗教を論じた著作中，ユローヂヴィに触れてこう言っている。

> 何人かの作家たちも，多かれ少なかれの理解と共感を込めて，ユローヂヴィを描くことを忘れはしなかった。それは，トルストイ（『幼年時代』），ドストエフスキー（『悪霊』），諷刺作家サルトィコフ＝シチェドリン，人民主義者のグレープ・ウスペンスキーとナウーモフといった作家たちであり，またプルィジョフとコロレンコは，ユローヂヴィの研究書を上梓している。[18]

以下，作家別に具体的作品にそくして，ユローヂヴィの形象を概観してゆく

が，パスカルの挙げている作家中，ウスペンスキーとナウーモフは扱わない。単に不勉強のゆえである。その代わりという訳ではないが，プーシキンとレスコフを取上げることにする。シチェドリンとプルィジョフ，コロレンコについては作品の指定がないので，もしかしたらパスカルの念頭にあるものと相違しているかも知れない。またトルストイについては『青年時代』，ドストエフスキーについては『白痴』『カラマーゾフの兄弟』といった作品まで射程を広げて考えてみようと思っている。

II

＜1＞　プーシキン

1824～1825年に書かれた『ボリース・ゴドゥノーフ』の中に「モスクワの大聖堂前広場」と題された一節がある。

＜人民4＞　いや，あれはユローヂヴィだ。（鉄の帽子をかぶり，鉄の鎖（ヴェリーギ）をからだにまきつけたユローヂヴィ，悪童たちに取り巻かれて登場）

＜悪童たち＞　ニコールカ，ニコールカ――鉄の円錐帽子（コルパーク）！……やあい，やあい……

＜老婆＞　こら，いたずらっ子たちや，聖者（ブラジエンヌイ）さまを好きにしておやり。ニコラさま，罪ぶかいわたしのために祈ってくだされや。

＜ユローヂヴィ＞　おくれ，おくれ，1コペイカおくれ。

＜老婆＞　ほら1コペイカあげるよ。わたしのことを覚えていてくだされや。

＜ユローヂヴィ＞（地べたに座って歌う）

月はひかり，
仔猫は泣く，
ユローヂヴィよ，さあ立ちあがり，

神に祈れよかし！

（悪童たち再び彼を取り巻く）

＜悪童１＞　こんちは，ニコールカ。どうして帽子を脱がないの？（鉄の帽子を指先で弾きながら）わあ，いい音がする！

＜ユローヂヴィ＞　わし，１コペイカ持っとるよ。

＜悪童２＞　うそばっかり！じゃあ，見せてよ。（１コペイカふんだくって走り去る）

＜ユローヂヴィ＞（泣く）　わしの１コペイカ取られたよ。ニコールカをいじめなさる！

＜人民＞　皇帝（ツアーリ）だ，皇帝陛下（ツアーリ）のお通りだ。

（皇帝，大聖堂から出てくる。先頭を歩く一貴族，乞食どもに施し物を分け与える。貴族一同）

＜ユローヂヴィ＞　ボリースよ，ボリースよ，子供らがこのニコールカをいじめるよ。

＜皇帝（ツアーリ）＞　この者に施し物を与えよ。なにを泣いているのだ？

＜ユローヂヴィ＞　このニコールカを幼い子供らがいじめよるのじゃ……奴等をば斬り殺すよう命じなされ，お前さまが幼い皇太子を斬り殺したようにじゃ。

＜貴族たち＞　退（ど）け，ばか者！　このばか者をひっ捕えよ！

＜皇帝（ツアーリ）＞　すてておけ。あわれなニコラよ，余のために祈ってくれ。

＜ユローヂヴィ＞（皇帝のあとを追って）　だめじゃ，だめじゃ！　ヘロデ王のために祈ることはならんのじゃ――聖母さまがおゆるしにならんのじゃ。[19]

この戯曲はカラムジンに献げられているが，この場面の着想もカラムジンの『ロシヤ帝国史』第10巻に負っているに違いない。このユローヂヴィのモデルは，名前から推せばイワン雷帝に対する摘発で有名なプスコフのニコラ・サロスである。が，ボリース弾劾で歴史的に知られているのはモスクワのヨ

アンであり，ヨアンは「大円錐帽子（Большой Колпак）」という悼名をもっていたから，史実，服装では彼の方が，プーシキンのユローヂヴィにより近いと言える。カラムジンの著作中には，ヨアンの少し前に活躍し，同じくイワン雷帝への佯狂による批判で知られるワシーリー・ブラジェンヌィのことも言及されているというから，[20] 三者のアマルガムをモデルと見做すのが妥当な線だろう。

だが大事なのはモデル論ではない。大事なのは，老婆と子供たちの畏敬と嘲笑の中，ボリースの血ぬられた簒奪行為を，比喩的表現をもって当人の面前でズバッと言ってのけるという構図である。恐らくここに初めて，民衆に畏敬され信頼されるユローヂヴィ，民衆を慰安庇護し，民衆にかわって不正を摘発するユローヂヴィの概念が，文学的にあるいは芸術的に形象化されているからである。この形象はやがて歴史家クリュチェフスキーの手で，学問的にも確定されたものとして記述されることになる。宗教にしか関心を示さぬフョードル帝について語りながら，クリュチェフスキーは次のように言うのだが，それはプーシキンの創造したユローヂヴィに施された注釈とも読めよう。

> 古代ルーシにおいて，キリストゆえの佯狂が，いったいどのような意味をもち，どのような敬意を払われていたか，それは周知のことである。聖なる愚者たるユローヂヴィは，俗界のあらゆる幸福を断念した。即ち，肉体的のみならず精神的快楽や誘惑も，顕職，名声，尊敬，それに近しい人々の愛慕さえも断念したのだった。しかも彼は，こうした幸福や誘惑に対し果敢に挑戦すらしたのだった。貧しく，住む家ももたず，裸足でぼろをまとって街を歩き，正常の人ではなく狂気の人のように振舞い，無礼なことを口にし，通常の礼儀を軽蔑することによって，愚かな人々の嘲笑の的となろうと努めるとともに，まるで人々が愛し重んじる幸福も，愛され重んじられている人々自身さえをも愚弄しようとするかのようであった。自己卑下にまで達したこの謙抑さの中に，古代ルーシは，

神の王国の所有者たる心貧しき者たちの至福を説く気高き戒律の実践的成就を見い出していた。ユローヂヴィの姿をしたこの心貧しき者は，放浪する世界の良心であり，人間の欲と背徳を「正面から」発き出す生身の人間であり，社会において大きな権力と言論の自由とを享受していた。この世の強者，貴顕，皇帝，そして雷帝自身さえも，この街を彷徨する聖なる愚者の，大胆不敵にして嘲笑的あるいは罵倒するような言葉に辛抱強く耳を傾け，指一本彼に触れようとはしなかったのだ（傍点は原文イタリック）。[21]

＜２＞　トルストイ

俗界からの絶縁が苦行（佯狂）の根本要素のひとつであることを思えば，理想のために家庭を捨て，ひとり野垂れ死ぬトルストイの最期は何か暗示的である。それはともかくも，トルストイの子供時代にも，ユローヂヴィは依然日常的現象であったらしい。1851～1852年に執筆された『幼年時代』では，全28章中第５章と，とりわけ第12章の２つの章が，グリーシャというユローヂヴィに割当てられている。

第５章は「ユローヂヴィ」と題され，主人公の少年ニコーレンカ（＝トルストイ）の眼前に，ぼろをまとい杖をたずさえて現れたグリーシャの人となりと，彼に対するイルテーニエフ家の人々の対応が描かれている。

その声はあらっぽくて，かすれているし，挙動もせわしげで不確かだし，言うこともばかげていて脈絡に欠けている（彼は絶対に代名詞というものをつかわなかった）けれども，言葉のアクセントがいかにも感動的だし，その黄色い醜い顔が，ときおりまったくあらわに，かなしい表情をおびることがあって，それを聞いていると一種，憐憫と恐怖と悲哀のいりまじった感情がおさえきれなくなるのだった。

これがユローヂヴィで巡礼（ストランニク）のグリーシャだったのである。

彼はどこから来たのか？　両親は何者だったのか？　なにが今送って

いるような放浪生活を選ぶ気をおこさせたのか？　そんなことはだれひとり知るよしもなかった。ぼくが知っていたのは，彼が14の年からユローヂヴィとして知られるようになり，夏冬はだしで歩きまわって，僧院をおとずれたり，気にいった人々に聖像をやったり，謎めいたことを口にして，それがある人々には予言のように受けとられているということや，だれひとりそれ以外の格好をしているのを一度も見たことがないということや，たまにおばあさんのところへやってくることや，彼は金持ちの家に生まれた不幸な息子で心の清らかな男だと言う者もいれば，ただの百姓でなまけ者だと言う者もいた，ということだけである。[22]

この少年の眼をフィルターとした描写は，擁護的でも批判的でもない，いわば常識的観察では，佯狂とも本物の狂人とも，神秘的変容とも擬装とも見分けのつかぬユローヂヴィの存在様態を，見事に伝えている。その点は，グリーシャをめぐるニコーレンカの両親の会話に，より鮮やかにあぶりだされる。会話の発端は，食事の時母親が父親に，グリーシャや子供たちにとって危険な庭の犬をどうにかするよう頼み，それに応ずるかのようにグリーシャが発言したことである。だが父親にはグリーシャの発言が，母親の通訳なしでは理解できない。すると何を思ったのか父親は，グリーシャのようなユローヂヴィへの嫌悪と批判を口にする――「いや，わしは腹が立つよ，かしこく教養もある人々が，ああいったまやかしにはまりこんでいるのを見ると。<略>警察がああいった手合いを拘留してくれているようだが，あれはいいことだ。<略>ああいった手合いがなにかためになることをしてるとしたら，それはせいぜい，どっかの連中のただでさえ弱い神経をめちゃめちゃに狂わしているくらいのことだよ」。[23] これに反撥する母親の佯狂擁護論に，もはやプーシキンによって形象化されたあのユローヂヴィの大胆不敵さは聞こえない。予言とはいっても些細なものである。ここには，ひたすら神に仕えるという，どちらかと言えば佯狂の受身的側面への畏敬が表白されていると言えよう。どこか「余計者」じみた「この世の知恵ある」父親には，そうした母

親の信仰心は嘲笑の対象でしかありえない。

「それについては，わたし，ただひとつだけあんたに申しあげておくわ。年はもう60だというのに，夏冬はだしでとおして，重さが9貫近くもあるような鉄の鎖（ヴェリーギ）を着物の下にまきつけてはずしたこともないような人がですよ，安楽に，いたれりつくせりの暮しをさせてやるからとの申し出を一度ならず断わってきたような人が，そんな人がただの怠け根性からあんなまねをしているなんて，なかなか信じにくいことですわ。それに予言のことですけれど，＜略＞わたしが予言を信じるにはそれなりの訳がありますのよ。お話ししたことがあると思いますけど，キリューシャなど，なくなったパパに，なくなる日にちから時間まで，ぴたりと予言してみせたんですからね」

「いやはや，お前はなんてことをしてくれたんだ！＜略＞どうしてお前はあいつの足のことなど思い出させてくれたんだね？　あの足を見てしまったからには，わしはもうなんにも食べないよ」（傍点は原文フランス語）[24]。

少年ニコーレンカ（＝トルストイ）は，そして，ユローヂヴィを「神人（**Божий человек**）」として敬愛する母親に近い立場にいるように見える。第12章「グリーシャ」がそう思わせるのである。「鉄の鎖（ヴェリーギ）」を見たいとの好奇心から，グリーシャの部屋を覗きこんだニコーレンカ。その彼の眼前に繰り広げられたる光景とは，一体どんなものだったか。それは，法悦と涙の中ひたすらに神に祈るグリーシャの姿であった。少年が，初めに期待した楽しさと笑いに代わって，ぶるぶる身体がふるえ，心臓が止まりそうになりながら経験した感動は，こう記されている。

あの時から多くの年月が過ぎ，数多くの過去の思い出が，ぼくにとって意義を失い，判然としない夢と化し，巡礼のグリーシャさえももうだ

いぶ前に自分の最後の漂泊を終えてしまったが，しかし彼がぼくに与えた感動とよびおこした感情は，決してぼくの記憶の中で消滅することはないだろう。

おお，偉大なるキリスト教徒のグリーシャよ！　お前の信仰がかくも強いものだったからこそ，お前は神が近くにおわすことを感じとれたのだ。お前の愛がかくも大きなものだったからこそ，言葉はおのずとお前の口からあふれでたのだ――お前はそれらの言葉を理性で確かめるようなことはしなかった……。言葉を見つけられず，涙を流して地面に身をなげた時，お前は神の偉大さにどれほど崇高なる賛美を献げたことだろうか！……。㉕

ユローヂヴィは，三部作の最後の作品『青年時代（ユーノスチ）』（1855～1856年）にも登場する。だが今度は，残念ながら，青年ニコーレンカ（＝トルストイ）自身の直接的経験として言及されてはいない。そこでは，ニコーレンカの親友ドミートリーをめぐる一エピソード中に，名前が言及されるだけである。ドミートリーは，家族のいる別荘に向う途上，ニコーレンカに家族のプロフィールを語るが，たまたま一緒に住んでいる「赤毛の女」（リュボーフィ・セルゲーヴナ）のことをとりわけ熱を込めて語る。

彼女はもう若くはない，いやむしろ年をくっている方だし，それにさっぱりきれいじゃない。でも，美を愛するなんて――まったくばかげているし，無意味なことだよ！　ぼくにはそんなこと理解できないよ，あんまりばかげているからね。＜略＞だけどあの気立て，あの心，あの生き方……あんな娘は今どきの世間じゃ絶対見つかりっこないね。＜略＞でも，きっと君には，彼女の言うことも，彼女の人となりもすぐにはわからないだろうな。彼女は控え目で，内気といってもいいくらいで，自分の美しくもすばらしい面を見せびらかすのを好まないからね。現に母だって，君もすぐわかるけど，きれいで頭もいいんだが，――リュボーフ

ィ・セルゲーヴナをもう何年か前から知っていながら，彼女のことを理解できないし，理解しようともしないんだ。昨日だってぼく……昨日君にきかれた時，どうしてぼくが不機嫌だったか言ってしまおうね。実はおととしリュボーフィが，一緒にイワン・ヤーコヴレヴィチの所に行ってほしいって言うんだよ，――君，イワン・ヤーコヴレヴィチのこと，たぶん耳にしたことあるだろう，あの人，気違いみたいに見えるけど，本当はすごい人なんだよ。リュボーフィは，そりゃ君，とても信心深い娘でさ，イワン・ヤーコヴレヴィチという人間を完全に理解してるんだよ。彼女はしょっちゅう彼の所へいっちゃ，彼と話をしたり，貧乏な人たちのためにといって，自分のかせいだ金を彼の所においてきたりしてるんだよ。彼女はすばらしい女性だよ，君も今にわかるけどね。で，まあ，ぼくも一緒にイワン・ヤーコヴレヴィチの所へ行ってきたんだが，あのすごい人に会えたんで，彼女に大いに感謝してるんだ。でも母は，そうしたことをどうしてもわかろうとしない，迷信だと思ってるんだよ。それで昨日，生まれて初めて母と口喧嘩しちまったのさ，かなり激しい口喧嘩をね。[26]

後に詳述するが，イワン・ヤーコヴレヴィチとは，19世紀の中葉にモスクワで予言者として人気のあった（偽）ユローヂヴィのことである。ここでドミートリーは，彼の中に言わば神秘的変容者を見い出し，他方母親は，世間を誑（たぶらか）る迷信家を見ている訳だが，ユローヂヴィに対する正と負の構図は，『幼年時代』のニコーレンカの両親のそれと変わらない。そうした構図は，佯狂というパラドキシカルな存在そのものから生まれる当然の帰結である。だから，イワン・ヤーコヴレヴィチをめぐる議論の時，母と同意見の妹ワーレンカがどう批判しようと――「兄さんはいつだって，他の人が嘲笑し，皆が軽蔑しているもの，そうしたものすべての中に，何か並外れて立派なものを見ようとしているのよ」[27]――，彼にとってその批判は転倒した響しかもたないのだ――「第一に，この上なく軽薄な人間でもなきゃ，イワン・ヤーコヴ

レヴィチのようなすごい人を軽蔑するような口はきけないのだし，第二に，お前は反対に，眼の前にある立派なものを故意に見ようとしないようにしてるじゃないか」（傍点は原文イタリック）[28]

しかし問題はニコーレンカだ。かつてあれほどグリーシャに感動し，長じても懺悔聴問僧の言葉にうっとりしたりもするニコーレンカ（『青年時代』6～8章）は，リュボーフィとイワンに心酔するドミートリーをどう見ているか。彼の興味は信仰ではなく恋愛の地平にあるので，どうとも言えないが，「不可解なリュボーフィ」[29]「ドミートリーのリュボーフィに対する奇妙な愛」[30]といった表現，あるいはイワン・ヤーコヴレヴィチをめぐるドミートリー親子の議論に際して，リュボーフィの言った言葉が彼に及ぼした作用（「彼女の格言も，議論を中断させることはなく，ただぼくに，リュボーフィとぼくの友人の方がまちがっているんじゃないかと思わせただけだった」）[31]から推して，どちらかと言えば否定的だと言えるのではなかろうか。いずれにしろ，ニコーレンカにとってドミートリーは，「善良で，愛想がよく，柔和で，陽気で，しかもそうした人好きのする自分の資質を意識している人間」[32]であると同時に，「冷淡で，自他ともに対して厳しく，尊大で，狂信的と言えるほど信心深く，こちこちの道徳家」[33]でもあるのだが，ここでユローヂヴィの担う働きとは，結局，この後者のドミートリーを表象する記号以上のものではないように思われる。

＜3＞　プルィジョフ

既に述べたが，イワン・ヤーコヴレヴィチ・コレイシャ（1781～1861）は，19世紀中葉のモスクワでは知らぬ者のいないほど有名なユローヂヴィである。彼の存在は，広く人口に膾炙した社会現象ですらあった。ブロックガウス＝エフロン百科辞典に彼の項があるのは，その一証左となろう。この百科辞典に依れば，彼はスモレンスクの神学校に学び，いったんは教師となるが，後に修道院を遍歴するようになり，遂にはスモレンスクのとある荒地の古びた

浴場に住みつき，禁欲生活を始めたのだった。そのうちに彼の予言能力を信奉する人が数多く彼の庵を訪問するようになるものの，1817年彼の予言がさる有力者の逆鱗にふれたのがもとで，モスクワの精神病院に収容されてしまう。病院では地下室に鎖でつながれたにも拘らず，信奉者が自然と集まり出し，1821年，病院の個室に移ってからは，訪問客の百人を下回る日は，ただの１日もなかった。週刊紙「**Домашняя беседа**」は彼を，キリストの名の下に佯狂に従事する者とほめたたえ，彼には過去と未来の双方を見通す力が備わっているとした，とされている。さらに辞典は最後に，コレイシャの名は1860年代の文学論争において，不合理のシンボルとして多用されたとも伝えている。

辞典の筆者は何も触れていないが，しかし，ユローヂヴィを宗教的な現象としてよりも，社会的現象としてまともに考察の俎上にのせようと図ったのは，恐らくプルィジョフが最初であった。あるいは，彼の『モスクワの有名な予言者イワン・ヤーコヴレヴィチの生涯』の登場をまって初めて，ユローヂヴィという社会現象が，読み捨ての雑報からまともな研究対象の地位へと押しあげられたというべきかも知れない。プルィジョフの略伝については以前紹介したことがあるので，そちらに委せるとして，[34] 1860～1865年に発表されるユローヂヴィ関係の論文は，彼自身が研究目標とした６つのプラン中の「民衆の信仰」「分派，異教，分離」[35] の一部に相当すると言えよう。ここで扱うのは，前述の作品，それに『26人のモスクワの偽予言者，偽ユローヂヴィ，馬鹿女に馬鹿男』の２作である。[36]

プルィジョフは，ユローヂヴィに関する著作をものした経緯についてこう回想している。

> この小冊子（『イワン・ヤーコヴレヴィチの生涯』）のおかげで私は，前代未聞の狂信主義と無知蒙昧と堕落の一大世界を発き出すことができた。そうしたものは未開人の間ではお目にかかれぬもので，モスクワのロシヤ正教の懐を温床としているのである。私は以前にもあれこれ多くのこ

とを知ってはいたが，今はもう身の毛がよだつ思いで，この世界を徹底的に究明しようと，ぼろに身を包み，頭陀袋をさげ，偽聖人（ハンジャー）の一団（約150人）とともに修道院巡りの旅に出たのだった。この一団には，売買のために偽聖人たちに誘惑された娘もひとりいた。彼らのやったことと言えば，それはひたすら大酒をくらい，神を冒瀆し，無垢な娘を公然と売買し，ファナチックにどなりあい，歌を歌い，祈り，ヒステリーをおこし，聖書を朗読し，魔術的呪文を唱えるというようなことだった。こうしたことの帰結がユローヂヴィに関する著作なのである。[37]

プルィジョフが，佯狂という宗教的完徳のための苦行についてどう考えていたかは不明である。それにしても，28人のユローヂヴィを俎上にのせる彼の手つきは，激しく暴露的である。真も偽もありはしない，あるのはただ佯狂というペテン行為のみだと言わんばかりである。「**Домашняя беседа**」が霊験あらたかと称揚するイワン・ヤーコヴレヴィチにしても，その言動を描くプルィジョフの筆致は醒めている。例えば予言とみなされるその書付について，ギリシャ語やラテン語，それに文字ではなく記号を使うのは神秘的な感じを付与するためで，一般的には意味不明の走り書きが，謎に包まれた予言ともなりうるのは解釈者の恣意に基づいてのことだとした後，「それこそが女性の崇拝者を絶対に逃さない肝心な点である」[38] と彼は結ぶのである。無論彼は，イワン・ヤーコヴレヴィチ自身の佯狂ぶりだけを批判しているのではない。むしろ，彼に誑られる人々，彼の佯狂に積極的に意味を読みとろうとする人々を，より激しく弾劾しているのだ。イワン・ヤーコヴレヴィチの棺から流れでる水，あるいはその水分でぬれた棺の下の砂，あるいは彼が死んだ時に身につけていた肌着の切端等々を手に入れようと必死な人々の姿[39]——そこにプルィジョフが何を見ていたかは明白である。末尾に引用される詩の最後の4行こそ，プルィジョフの偽らざる心境なのではあるまいか。この詩は，イワン・ヤーコヴレヴィチの死と，その死を悼む人々のことを歌っている。

そうだ泣くがいい，哀れな者たちよ，もう今は亡き人のことを，
老人にも若人にも等しく大切だった人のことを。
だがまた泣くがいい，あなた方の未開な知識のいまだ
啓蒙の光に照らされてはいないことをも！[40]

以下総勢27人のユローヂヴィが（うち7人が女性，即ちユローヂワヤである），陳列されてゆくが，基本的なトーンは変わらない[41]。佯狂を実入りの良い商売として自ら進んでペテン行為にふける者，15才の少女に佯狂を装わさせて金儲を企む人々，日曜学校などには興味がなくともユローヂヴィのためなら惜しみなく寄付をする人々が，社会の全階層を通じて容赦なく摘発されてゆく。プルィジョフは確かに，「そこ（下層の民衆）にはそこの偏見がある一方，修道院や豪邸の中にもそれなりの偏見があるのだ」[42]と認識しているのであり，彼にとって佯狂とは何よりもまず「社会的な疾病」[43]に他ならないのである。『26人のモスクワの偽予言者，偽ユローヂヴィ，馬鹿女に馬鹿男』について，プルィジョフ自身が見事な解説を施しているので，かいつまみながら引用しておこう。これはそもそも書評として発表されたものだが，ユローヂヴィ無しでは生きられぬさる貴族の奥さんが，この本相手に悪戦苦闘するのを見て，この奇妙な本の正体を明かす役目を買ってでるという形で始まっている。

我国の社会では2種類の人間にお目にかかれる。一方は，本当のユローヂヴィであると同時にユローヂヴィを信仰もしているのだが，優雅な物腰で肉付がよく，繻子とビロードをまとっている。もう一方はその逆で，ユローヂヴィなんかじゃ全然ないのに，ユローヂヴィのように振舞って無作法の限りを尽くし，ぼろを身につけているのである。（原文改行）前者に属すのは，まるでペストにでもかかっているものでもあるかのようにカフタンとズボンを脱ぎ捨て，西洋から衣裳はちゃっかり戴いたものの，知恵の方はうまく我物に出来なかった上流の人々であり，後

者に属すのは，父祖伝来の生活に別れを告げられぬまま，昔と同様のカフタンとズボン姿で歩き回っている百姓たちである。流行の発条付きスカートをはいた御婦人連は誰も，進んで人間を百姓呼ばわりし，――彼女らは人間の人間性を尊重するまでに成長していないのだ！――また，百姓連と同じ馬車に同席しないというためだけに，進んで50コペイカ銀貨をさしだすのだ。それでいて，同じ百姓が偽聖人を気取り出し，ユローヂヴィのように振舞い，馬鹿気たまねをして人を惑わし始めるや否や，同じスカートの御婦人は，その百姓をえも言われぬほどに崇めたて，自分のジュピターに仕立てあげ，おべっかを使い，馳走をふるまい，裕福にしてやろうとするのだ……。＜略＞（原文改行）ユローヂヴィは，既に述べたように，全員〔これは大仰で「殆ど」というべきである――引用者〕百姓の出である。彼らは生来の馬鹿か，あるいはダニールシカのように悲惨な運命のために頭が変になった者，あるいは悪どい詐欺師，残虐な狂信家である。彼らは皆，馬鹿のふりをしているが，概して彼らを信じる人々よりはずっと賢いのである。＜略＞（原文改行）佯狂に対する信仰，本当のユローヂヴィ〔**настоящие юродивые** とは，この場合，先天的，後天的とを問わず精神が薄弱で，佯狂を欲する人々に無理矢理佯狂を強制されたユローヂヴィのこと――引用者〕に対する信仰は，野獣性にまで達している，いやどんな野獣性よりももっと悪い！＜略＞ユローヂヴィは到る所に掃いて捨てるほどいる。モスクワだけでも26人のユローヂヴィがおり，ヴォロネシやウグリチはユローヂヴィにむせかえっているということを思い起こしてもらいたい。歴史上かつては栄光を馳せたトヴェーリ全体が，今ではレーシカというユローヂヴィに支配されていること，そして恐らくは，今日に到るまで依然として，母なるルーシのあちこちである人々が幽閉され，鎖につながれ続けており〔つまり仕立てあげたユローヂヴィが逃げられぬようにである――引用者〕，静かな平安のうちに，もっともらしい体裁のいい外見に隠れて，様々な犯罪が跋扈しているのだ，ということを思い起こしてもらいたい……。

（傍点は原文イタリック）[44]

プルィジョフに到っては，もはやプーシキンの刻みあげた摘発者としてのユローヂヴィの形象も，トルストイが感銘をうけた求道者としてのユローヂヴィの形象も，その面影は微塵も残っていない。19世紀前～中葉のロシヤには，もはや，真贋など問題にならぬだけの偽佯狂が漫延しており，少なくとも革命的民主主義者たるプルィジョフには暴露され，摘出されるべき対象でしかなくなっていたのである。

＜4＞　サルトィコフ＝シチェドリン

作中のユローヂヴィの描き方という点では，シチェドリンはプルィジョフと同一平面にいるように見える。1860年代から1880年代にかけて左翼論壇の中心人物であり，19世紀最大の諷刺作家と呼ばれる彼が，プルィジョフに近いのは当然かも知れない。

シチェドリンはトヴェーリ県の地主貴族の子として生まれているが，生まれた時からユローヂヴィに縁があったらしい。というのも，彼の名付親はユローヂヴィだったからである。このユローヂヴィはドミートリー・ミハイロヴィチ・クルバートフといい，父親は彼を予言の才をもった「神人」と見なし，宗教的な話題の話相手として長年つきあっていたと言うし，母親は後にシチェドリンが生まれた時のその男の予言――「この子は軍人になる」――を思い出している。[45] こうした幼少時の出来事は，多少の変更が加えられた形で，『僻地の旧習』（1887～1889）の中に再現されている。

> 当時我々の家には町人のドミートリー・ニコーヌィチ・バールハトフという祈禱師が滞在していたが，郡内では彼は予言能力のある人だと考えられていた。（原文改行）ところで，私のことについて母が，生まれるのは息子か娘かと尋ねると，彼は雄鶏のような声を出して『雄鶏，雄鶏，

爪がとんがってる！』と言った。それからお産はまもなくかどうかをきくと，彼は小匙で蜜をすくい出し，＜略＞ 7杯目でやめて，『ちょうどこの時ですじゃ！』と言った。『あの人が言った通りになりましたよ。ちょうど7日目にお母さんはお産みになったんです』――後に〔産姿の――引用者〕ウリヤーノ・イワノヴナは私によくこう話してくれたものだった。その他に彼は，私の未来の運命について，私が多くの悪者どもをなぎ倒し，女たらしになるだろうと予言した。[46]

ここまでは，いわば定型的なユローヂヴィ描写だが，シチェドリンはさらにこう続けている。

ちなみに後に私は，私の名付親が手に錫杖をもち，群衆にまじって，洗礼の行列について歩くのを，一度ならず目にしたものだ。彼は，僧侶の長衣（ポドリヤースニク）のような独得な服を着，毛糸で刺繍された幅の広い帯をしめ，両肩まで髪をたらして歩いていた。＜略＞しかしさらに本当のことを言わねばならないが，バールハトフはその予言能力と「祈禱師（ボガモール）」という称号にも拘らず，あまりにもしばしば女中部屋を覗きこむので，母はそれが気に入らず，「下司女たち」の行状を厳しく見張っていたのだった。[47]

シチェドリンにとっても，佯狂は先ず詐欺行為か精神的堕落の表象に過ぎないのだが，そのことは彼の文名を確立した『県の記録』（1856～1857）に既にはっきりと刻印されている。この作品は，短編あるいは寸劇が3～4ずつ大きな表題でまとめられているが，その中に「ユローヂヴィエ」という表題でまとめられた3つの短編が収められている――「無能な人々（Неумелие）」「不埒な人々（Озорники）」「疲弊した人々（Надорванные）」。いずれも郡のもめごとの調査に県庁から派遣される官吏を扱っているが，現場にいっても民衆相手に手も足もでず，ただ無能ぶりを晒け出したり，民衆などという蒙昧の輩の言うことなんぞに耳を貸すことはない，大事なのは純粋な理論，純粋

な規則なんだとふんぞり返ったり，生身の人間を相手にすれば規則と情の板ばさみで疲れるから，書類のみを相手にしようとしたり，といった風にいずれもが腐敗した官吏のポートレートとなっている。[48] 実際のユローヂヴィはまったく姿を見せないが，この3つの短編を「ユローヂヴィエ」としたシチェドリンの意図は明白である。即ち彼にとってユローヂヴィとは，人間本性に何ら根差す所のない行政機構の中で，「健全な人間の理性，心理，行動規範を失った人々」[49] の謂に他ならないのだ。

だが無論，シチェドリンにおいて比喩としてしかユローヂヴィが使用されない訳ではない。『ある町の歴史』（1869～1870）には，実物のユローヂヴィが何人か登場し，それなりの役割を担っている。

初めに登場するのは第4章「オルゴール」で，市長官ブルダーストィーのオルゴールでできた頭が紛失したために，グルーポフ氏の住民が不安に騒ぎ出した時に現れる。

> その時，有象無象のユローヂヴィが大手を振って市中を徘徊し，人々にありとあらゆる災厄を予言するのだった。ミーシカ・ヴォズグリャーヴィーとかいう男は，夜中にさる厳しきお方が，燦然と輝く雲を身にまとって我夢枕に立たれたということを力説していた。[50]

次は第8章「藁の都市」に現れるが，今度は，アルヒープシコとアニーシユシカという具体的な名をもっている。2人は共に翌日の火事を予言するのだが，方法は異なる。アルヒープシコの方は，広場の市の中央に立つとルバシカを風になびかせながら「燃えている，燃えている」とか，「矢が飛ぶ，火が吹く，悪臭と煙で息がつまる。炎の剣が見え，首天使の声が聞こえようぞ……燃えている」[51] と支離滅裂なことを言うや，即座に姿を消す。続いて同じ場所に現れたアニーシユシカはといえば，地面を指で掘り始め，「財産を隠すのさ……リボン8本……ぼろ布8枚，絹のハンカチ8枚……金のボタン8個……ルビーのイヤリング8個……エメラルドの指輪8個……琥珀のビー

ズ飾り８個……偽真珠のネックレス８本……９つ目は赤いリボンを１本……ひひ！」[52] とまたしても意味不明のことを口走るのである。結果的に予言は的中する。だが，だからといって彼らに何らかの特別な意味が付与されているようには見えない。わずかに，火事の時に納屋の中で焼け死んでゆくアルヒープシコの姿が，一瞬輝しい佯狂の伝統に連なるかのように描かれるだけである。

> 赤々と燃えさかる粗朶にとりかこまれた彼の黒い獣のような姿は，明るく輝いているかのように見えた。人々が目にしているのは，いつも見かけるあの汚ならしいみなりに，どんよりした目つきでふらふらしているあのアルヒープシコでも，断末魔の痙攣に身を委ね，普通の人なら誰しもがそうするように避けがたい死とはかなくも闘っているアルヒープシコでもなく，熱狂者の如くあふれる歓喜の重荷にへとへとになっているアルヒープシコであった。[53]

ユローヂヴィが重要な役割を演ずるのは，第12章「マモーナ崇拝と悔悟」においてである。長年の平安に風紀は紊乱し，多神教にうつつをぬかして毎日カーニバルをくり返すグルーポフ市。そこに新長官としてグルスチーロフが着任する。彼は着任早々から，市の軽佻浮薄の風潮に親しみ，放縦な生活を楽しむが，ある時プフェイフェル夫人なる女性の言葉に啓示をうけ，罪深きグルーポフ市を救おうと決心する。こうして彼は，精神的援助をうけるべく，前述したアクシーシユシカ，及び焼死したアルヒープシコにかわって市民の畏敬を集めているパラモーシャのもとを，プフェイフェル夫人と一緒に訪ねるのである。

> 彼の眼前に現れた光景は驚嘆すべきものだった。汚ならしいむきだしの床に，２つの半裸の骸骨のようなものがころがっていた（それは既に祈禱から帰っていたユローヂヴィたちであった）。彼らは，何か支離滅裂

なことをぶつくさ言ったり，叫んだりすると同時に，熱病にかかっているかのようにぶるぶる身体を震わせたり，顔をしかめたり，身体を縮めたりするのであった。どんよりとした光が，埃と蜘蛛の巣におおわれたたったひとつのちっぽけな窓から，穴ぐらの中にさしこんでいた。壁は湿気と黴だらけであった。凄じい悪臭で，グルスチーロフは最初の瞬間おろおろして，鼻をおさえたほどだった。めざとい老婆（アクシーシュシカ）はそれに気づき，（原文改行）『皇帝の香水だよ！　天国の香水だよ！――とつんざくような声で歌うように言い出した――この香水がいらんというのはどこのどいつだい？』（原改）彼女はそう言いながら，プフェイフェル夫人が支えなかったらグルスチーロフがよろめいただろうと思われるような動作をした。（原改）『あんたの魂は眠っている……深い眠りについている！――と彼女は厳しく言った――ちょっと前にはまだ元気一杯とばかりにふんぞり返っていたのに！』（原改）『魂が枕をあてて眠っている……魂が羽ぶとんかぶって眠ってる……神様がこつんこつん！　頭をこつんこつん！　頭のてっぺんをこつんこつん！』とアクシーシュシカは，グルスチーロフに木端や土塊やごみを投げつけながら金切声を立てた。（原改）パラモーシャは犬のように吠え，雄鶏みたいに叫んでいた。（原改）『ししっ，悪魔め！　雄鶏が歌い出したんだぞ！』と彼その合間に呟いていた。（原改）『不信心者よ！　内なる声を思いだしなさい！』とプフェイフェル夫人が横合から迫った。（原改）グルスチーロフは元気づいた。（原改）『母なるアクシーニヤ・エゴーロヴナ！　どうか我を許したまえ！』と彼ははっきりした声で言った。（原改）『私はエゴーロヴナ，私はおしゃべり女！　太陽神は――悪さした！　家畜神は――はげちゃびん！　雷神は――おいぼれ……パラモーン――彼は賢い！』とアクシーシュシカはきいきいわめくと，身を縮めて黙りこんだ。（原改）グルスチーロフはあたふたとまわりを見回した。（原改）『これはつまり，パラモーン・メレーンチチに額づかなければならないという意味です！』とプフェイフェル夫人が耳打ちした。（原改）『父なるパラモーン・メレー

ンチチ！　どうか我を許したまえ！』そう言ってグルスチーロフは額づいた』（原改）しかしパラモーシャはしばらく，ただ身を縮めてしゃっくりをするだけだった。（原改）『もっと低く！　もっと低く額づくのじゃ！――とアクシーシユシカが命じた――背を惜むな！　背はお前のじゃなく，神のものだ！』（原改）『どうか，父よ，我を許したまえ！』とグルスチーロフは，さらに低く頭を下げてくり返した。（原改）『働かざればパンはなし！』とパラモーシャは，奇妙な声で呟いたかと思うと突然とびあがった。（原改）彼に続いて間髪おかずにアクシーシユシカもとびあがり，彼らは旋回しだした。彼らは初めゆっくりと旋回し，静かにすすり泣いていたが，そのうちその旋回はどんどん速度をまし，遂には龍巻と化してしまったのだった。笑い声やら金切声，ふるえ声，それに春に無数の蛙の休屋となる池でしか聞けないような鳴き声が響きわたった。（原改）グルスチーロフとプフェイフェル夫人は，しばらく恐怖につっ立っていたが，遂にはがまんできなくなってしまった。初め彼らは身を震わせたり，うずくまったりしていたが，そのうち次第に旋回し始め，突然龍巻のようにぐるぐる回って可々大笑し出した。これは，聖霊降臨が成就され，許しの願いが聞き入れられたということを意味するものだった。[54]

かくてグルーポフ市はユローヂヴィの支配下に陥り，その生活ぶりは一転して極端に禁欲的なものと化してゆく。今引用した箇所に，E. タターリノヴナの主宰した分派の「儀式（**радение**）」を重ね，彼女を庇護したアレクサンドル１世への諷刺嘲笑を透し見ることもできるという。[55] だが，今さしあたって注意しておきたいのは，パラモーシャとは紛れもなくプルィジョフの活写したイワン・ヤーコヴレヴィチの引写しであり，またアクシーシユシカも恐らく『26人のモスクワの偽ユローヂヴィ』の，例えばエヴドーキヤ・タムボフスカヤの影響下にあるということである。そして無論その筆致も，権力を手にしたユローヂヴィたちの，めかしこんで無為の至高性を説き，乞食の至純

性をえさに蓄財を目論む様子が描かれていることから考えて，佯狂自体の詐欺性と，佯狂を支える側の蒙昧とを撃とうとするプルィジョフの延長上にあると言えるだろう。[56]

とはいえ，シチェドリンが苦行としての佯狂にまったく否定的だったと言いたいのではない。1855年モスクワで『聖アトス山の修道僧パルフェーニーのロシヤ，モルダヴィヤ，トルコ，及び聖地巡礼の記』が出版されているが，シチェドリンはこれを耽読しているからである。耽読し，宗教的にではなく，あくまで民俗学的見地から読んでいると強調しながらも，苦行によって自己を滅却し，真の信仰に到ろうとする修道僧への共感を隠しきれなかったようだからである。[57]

＜5＞　ドストエフスキー

前述したパルフェーニーの『巡礼記』はまた，ドストエフスキーの愛読書でもあった。彼の蔵書にはこの本の第2版があったし，[58] 彼自身，『カラマーゾフの兄弟』第2部第6編「ロシヤの修道僧」の「素朴な語り口」はパルフェーニーから借用したものだ，と告げている。[59] とすれば彼は，パルフェーニーの『巡礼記』の第1部167章「ユローヂヴィのヨアン・ヤーコヴレヴィチについて」からも，このユローヂヴィの存在は知っていたことだろう。だが『巡礼記』第1部167章の情報量は，極めて微々たるものである。パルフェーニーがワラアム島の修道院からやってきた知合いの修道僧に誘われて，神の僕ヨアン・ヤーコヴレヴィチを訪問した時の模様――彼（ヨアン）が何も言わず佯狂にふけってばかりいたこと，お茶をある人々には砂糖入り，ある人々には砂糖なしで与え，またある人にはお茶を出さなかったこと，聖アトス山にゆく途上パルフェーニーは病気になるだろうが，彼の出したお茶のおかげで助かると予言したこと，などが知れるだけである。[60]

ドストエフスキーがイワン・ヤーコヴレヴィチについてのより詳細な情報を入手するのは，恐らくプルィジョフの著作によってである。そのことは，

『悪霊』（1871年）第2部第5章「祭りの前」第2節を読めば，一目瞭然であろう。まして『悪霊』は，プルィジョフ自身も連座したネチャーエフ事件を下敷きにしていて，「五人組」のトルカチェンコとはプルィジョフの戯画的形象であり[61]，さらに小説の舞台となる町がシチェドリンのグルーポフ市に比べられているとなれば，これは疑いようもないだろう[62]。

『悪霊』第2部5章2節に描かれているのは，スタヴローギン，ピョートル・ヴェルホヴェンスキーといった社会を覆そうとするいわば「悪霊」につかれた人々，それに退屈に倦んでいる地主貴族婦人たちのセミョーン・ヤーコヴレヴィチ詣である。文中に明示されてはいないが，目的は気散じ，しかも，聖像を鼠にすりかえたと噂される戦闘的無神論者リャムシンも参加していることから考えて，反宗教的デモンストレーションを含んだ気散じだと言えよう。それはさておき，セミョーンは冒頭こう紹介されている。

> 商人セヴォスチヤノフの家の離れには，単に我町のみならず，近在の諸県一帯，両首都にまでその名を知られる我聖人（プラジエンヌイ）にして予言者のセミョーン・ヤーコヴレヴィチが，はや10年あまり，平穏に，いたれりつくせりのくらしをしていたのである。誰かれとなく彼を訪れたが，とりわけよそから訪れる人が多く，その神がかった言葉（ユローヂヴオエ・スローヴオ）を拝聴しようと，額づいて寄進してゆくのだった。寄進は時にかなりのものとなり，セミョーン自身がその場で使途を考えない場合は，恭々しく神殿に，主として我ボゴロツキー修道院に献納されるのであった。このために修道院からはいつも修道僧がひとり，セミョーン付き当直として派遣されていた。一行の誰もがすこぶるつきの楽しみを期待していた。一行の誰ひとり，まだセミョーンに会ったことがなかった。ただリャムシンだけは，以前セミョーンを訪れたことがあって，その時セミョーンが，彼を箒で追払うよう命じ，彼の背中に我手で2個の大きなゆでたじゃがいもを投げつけたという話を，さかんに喋べりまくっていた[63]。

前述したように，プルィジョフは研究のためにユローヂヴィたちと修道院めぐりをしたことがあった。それに，1860年に出版された単行本『モスクワの有名な予言者イワン・ヤーコヴレヴィチの生涯』中に，「我々は一体他の何処で，現在イワン・ヤーコヴレヴィチを取巻いているあの息詰まるような雰囲気を究明できるだろうか。かくて我々は，今年の８月28日に彼を訪問したのだが，その訪問の結果を急いで読者に伝えようと思う」と書かれていたという２点から，リャムシンにもプルィジョフの影を認めうる可能性はあるかも知れない。[64] しかし，以上の描写から確実に言えるのは，次の２つのことだ。

ひとつは，セミョーン・ヤーコヴレヴィチという名前について。プルィジョフのユローヂヴィ列伝中，セミョーン・ミトリチの項にはこうある。

> セミョーン・ミトリチをイワン・ヤーコヴレヴィチと比べると，後者には，前者とは恐らく何の共通点ももたない偉大なる古代ロシヤの哲学者・思想家を見いだすだろう。しかし，彼らはお互い血をわけた兄弟のようなもので，ただ前者は後者よりもやや露骨なだけである。もし後者が，床の上の埃や泥，脂肪の中を転げ回るとすれば，前者は――これはもう，人間なのか動物なのかも見分けのつかぬような生きた泥塊そのものである。[65]

ここから導出される結論は単純だ。セミョーン・ヤーコヴレヴィチとは，イワン・ヤーコヴレヴィチの父称とセミョーン・ミトリチの名を合成したものだということである。この操作が示すのは，まずは引用上の韜晦だが，あるいはそこに，見ようによってはまだ十分に神秘的なイワンのいわば格下げの意図がもられてないともいえなかろう。

もうひとつは，リャムシンの語るエピソードについて。プルィジョフは，医者も匙を投げたＢ公爵夫人に施された奇跡についてこう語っている。

彼女は2人の召使いにつきそわれて彼の部屋に入り，身体の具合について質問した。この時イワン・ヤーコヴレヴィチは，両手に2個の大きなりんごをもっていた。彼は何も言わずに，公爵夫人の腹をこの2個のりんごで殴りつけ，彼女は気分が悪くなって倒れてしまった。彼女はやっとのことで家に連れ帰られたが，するとあら不思議，翌日に彼女は元気になってしまったのだった。[66]

古来ユローヂヴィの必携品のひとつであったと思われる「箒」は別として，[67]「2個のじゃがいも」あるいは「2個のりんご」を用いるという行為は，明らかに呼応しあっていよう。ちなみに，「箒」「じゃがいも（＝りんご）」がいわゆる「悪魔払い」のメタファーだとすれば，神の冒瀆者リャムシンが，自分が掃きだされた行為を笑いの種たる椿事として吹嘲するのも当然である。

一行がセミョーンのもとに到着してからの描写にも，プルィジョフの記述との相似はいくつか見つけ出せよう。例えば，セミョーンが以前役人だったというのがそうだ。[68] また，一行の中のさる婦人が冗談半分に何かお告げをと言うと，セミョーンが突然猛然と卑猥でおぞましい言葉を投げつけたというのは，イワンがさして信心も深くない商家の夫人に対し，スカートの裾をまくりあげ「お前はすべてまきちらしてしまったのだ，でてゆけ！」と叫ぶ場面に相当するだろう。[69]

ただし，「ある人には砂糖を入れてやるかと思えば，ある人には砂糖をかじらせ，またある人には砂糖抜きであった」[70] というセミョーンのお茶の振舞い方は，先に言及したパルフェーニーの『巡礼記』中の記述と，殆ど一字一句そっくりであることは指摘しておかねばならない。[71]

ドストエフスキーに対するプルィジョフの影響の信憑性を決定的にしてくれるのは，しかし，『悪霊』創作ノートの次のような一節である。

最後にみんながそろって，イワン・ヤーコヴレヴィチの所への気晴らし旅行に加わった。＜略＞（原文改行）イワン・ヤーコヴレヴィチ，

「**Кололацы**」。「彼にはあからさまな **кололацы** があり，あんたにも同じ **кололацы** があるが，ただあんたは，それを最高の知恵だと思っているんだ。」（原改）ネチャーエフは彼が買収されていると考えているが，ミリュコーフは彼はただの馬鹿だと断言する。（原改）ネチャーエフはこう考え始める――「残念なことだ！　彼のような立場にいて，あれほどの影響力があったら，多くのことができようものを。」[72]

ここには，ユローヂヴィ詣についての，最終稿では切捨てられてしまったかのような，単なる一挿話以上の意味付けがある。ここでネチャーエフ＝ピョートルは，革命の手段，民衆の煽動手段としての佯狂を口にしているからだ。「**кололацы**」を始めとして意味不明の偽金言を使って，市長官グルスチーロフを意のままにグルーポフ市を征服するパラモーシャ――あのシチェドリンの手になるユローヂヴィを想起しよう。ピョートルは恐らく，完全に形骸化してしまったユローヂヴィ，佯狂の受身的本質を完全に捨象し，能動的本質に革命という衣をかぶせたユローヂヴィなのだ。もし，セミョーンもピョートルも，プルィジョフの描いたイワン・ヤーコヴレヴィチをモデルとした形象だとしていいのなら，セミョーンをとりまく世界とピョートルたちの暗躍する世界は，パラレルなものとして描かれているのだ，と言えよう。両者の差異はただ，宗教的雰囲気を擬装するか，否定するかだけである。

ところで，ドストエフスキーにはまったく別の，積極的に肯定的ニュアンスを担わされたユローヂヴィもいる。作家の弟アンドレイが回想しているように，ドストエフスキーもまた，トルストイやシチェドリン同様，幼少時から佯狂という現象に親しんでいたと思われる。[73] もっとも，他の２人のように，自身の回想として，共感的であれ批判的であれ「佯狂」について語ったことはないから，あるいは「死の家」を通じて初めて彼の思考の対象となったのかも知れない。が，いずれ彼は，プーシキンによって形象化されたユローヂヴィの伝統を久々に継承発展させようとする者でもあるのだ。

『白痴』（1868年）第１編１章のロゴージンとムィシキンのやりとりの中に，

次のような箇所がある。

「ところで女に関しちゃ，公爵，あんた，かなりのやり手かね？ 前もってきかしてくんな！」
「僕が，い，いや，だって僕は……恐らく御存じないでしょうが，僕は生まれつきの病気で，女というものをまるで知りもしないんですから」
「へぇー，そんなら公爵――とロゴージンは叫んだ――お前さんはまったくのユローヂヴィって訳だね。神様は，お前さんみたいな連中を愛してくれるんだぜ！」[74]

ムィシキン公爵がイエス・キリストを倣ぶ者であり，そうであることによって作家の「完全に美しい人間」像を具現していることについては，かつて論じたことがある。[75] その際ムィシキンが「ユローヂヴィ」と呼ばれることの意味についても言及しておいたので，詳細はそちらにゆずることにしよう。ただ，『白痴』がいわばタッチストーンたるムィシキンを中心に展開される劇であること，白痴である筈のタッチストーンに触れた人はすべて自ら馬脚を露呈するはめになること，そしてそれは，死臭ふんぷんたるカオスの中枢ペラルブルクに対する，ピョートル大帝に圧殺されながらも民衆の意識に深く根差した歴史的聖性による挑戦という図式に基づいていることだけは，くり返し確認しておかねばならない。

だが，ムィシキンの内にたとえどれほど見事に「美しい人間」像が結ばれていようとも，ドストエフスキーは満足しなかった。ムィシキンは今一度，カオスの世界と対決しかつ超克するユローヂヴィとして復活させられることになる。『カラマーゾフの兄弟』のアリョーシャは，こう紹介されているからである。

アリョーシャの性格上の特徴で，際立ってさえいる特徴は，彼は自分が誰のおかげでくらしているのかなどということはまったく無頓著だった

ことである。＜略＞だがアリョーシャのこの性格上の奇妙な特徴も，あまり厳しく非難する訳にはいかなかったようだ。というのも，ほんのちょっとでも彼を知る人なら誰でも，この点についての疑問が頭をもたげるや即座に，アレクセイというのは，ユローヂヴィのような青年の一人で，たとえ突然丸々一財産もらったにしても，最初の一声で慈善事業にさっさと寄付するか，あるいはねだられたってんでただのやり手のペテン師野郎にさえくれてやりかねない男だからな，と納得してしまうからであった。[76]

次にひき続いて，「作者より」の主人公アリョーシャについて語った部分を引用しよう。

これは奇妙な男で，変人（チユダーク）とさえ呼びうる。しかし奇人だ変人だと見なされることは，注目される権利をその人に与えるというよりはむしろ損っている。とりわけ，個別性を統合し，全体的不条理の中でせめて何らかの共通の理解を見つけようとみんなが骨を折っている時代においてはそうである。変人とは，殆どの場合，個的に孤立した存在だからである。そうじゃありませんか？（原文改行）そこでもし，読者諸君がこの最後の命題に同意せず，「そうじゃない」とか「必ずしもそうじゃない」とお答え下さるとしたら，私は恐らく，我主人公アレクセイ・フョードロヴィチの意義について，意を強くするでありましょう。何故ならば，変人は「必ずしも」個的で孤立した存在ではなく，それどころか逆に，ひょっとしたら，変人こそがある場合には全体の核心を担っているのであって，同時代の他の人々は皆，ちょっとした一陣の風のために，一時的に何故だかその変人からはぐれてしまったのだ，ということもありえようからである……。[77]

くどくどした説明は不要であろう。主人公アリョーシャは，「変人」「ユロ

ーヂヴィ」であり，彼こそがロシヤの核心であり，他はピョートル大帝の推進した近代という突風に吹かれて，幻想のロシヤに住んでいると言うのである。大胆に言えば，現在我々の読みうる『カラマーゾフの兄弟』とは，アリョーシャにおける佯狂の受身的本質について，倣ぶべき手本ゾシマとの紐帯を通して語ったものであるとも言えよう。そしてさらに言えば，現代におけるアリョーシャの活躍が描かれる「中心となる第2の小説」[78]とは，修道院という閉ざされた聖なる空間で培った内なる光に照らされつつ，時にそれを見失いながらも，佯狂の能動的本質を今度は俗界という開かれた空間で鍛えあげてゆく物語なのではあるまいか。

ドストエフスキーの作品においては，分離派（ラスコール）あるいは分派（セークタ），それに女性（ユローヂワヤ）による佯狂も重要な役割を担っている。前者について言えば，『罪と罰』の場合，主人公のラスコーリニコフという命名からして既に分離派を連想させるし，『白痴』ではロゴージン一家が去勢派（スコープチエストヴオ）であり，『カラマーゾフの兄弟』でも，スメルヂャコフの養父は鞭身教（フルイストーフストヴオ）の信者，といった具合である。一方ユローヂワヤについて言うなら，『罪と罰』のソーニャ，『白痴』のマリー，『悪霊』のマリヤ・レビャートキナと尼僧リザヴェータ，『カラマーゾフの兄弟』のリザヴェータ・スメルヂャシチャヤ，とこちらもそうそうたるメンバーである。前述したように，佯狂はニコンの宗教改革以来分離派の中に包摂されてゆく傾向があったのだし，またユローヂワヤの輩出はロシヤ的特性のようでもあるから，これらを研究の視野から外すことは，ドストエフスキーは勿論，本論考全体を歪んだものにしている可能性もあろう。それを重々承知の上で，歪みの矯正は後日の機会に委ねたいと思う。[79]

＜6＞　レスコフ

レスコフには，宗教にまつわるテーマを持つ作品が数多くある。例えば邦訳で読める数少ない彼の作品中，『僧院の人々』（1872年）『封印された天使』（1873年）もそうである。ここでは，あのイワン・ヤーコヴレヴィチが実名で

登場する小品『小さな過失』（1883年）を取上げる。

お茶と砂糖を商う中流の商家に，カピトリーナ，カテリーナ，オリガという三人姉妹がいる。長女カピトリーナは結婚しているが，仲々子供が授らない。母親は，長女が石女とあっては，末の娘の結婚が心配だとばかりに，長年深い信頼をおいてきた奇跡成就者イワン・ヤーコヴレヴィチを訪れ，子供の授からぬ理由をきく。イワンは訳のわからぬことをもぐもぐいうが，側近の女たちの通訳によると，夫ラリーの信心不足のせいだという。が，ラリーは義母の言うことなどどこ吹く風で，彼女は再びイワンを訪れるが，イワンの体調おもわしくなく，側近の女が書付にしてあとで手渡す，という段取になる。「神の僕カピトリーナの悪夢を払い，神の僕ラリーの信心を深め下されますよう」と彼女は言い，そう書かれた筈であった。ここに事件がもちあがる。長女ではなくて次女カテリーナが妊娠を母親に告げるからである。母親はびっくり仰天して，イワンを訪ねるが，そこで書付に長女ではなく次女の名が書かれていたことを知る。夫に次女の妊娠をどう伝えたものか思いあぐねた彼女は，ラリーに相談する。ラリーは，悪いのは間違った奇跡を成就させたイワンだというが，彼女の方はイワンは義人だといってゆずらない。ラリーはシャンペン３本で父親とけりをつけようと請合う。こうしてラリーは，シャンペンを飲み，トランプをする合間に，父親に真相を打ちあける。父親は憤然として，イワンをはり倒すと息巻くが，それをラリーは，それでは三女の身にイワンの呪いがかかるといっておしとどめる。そうしてラリーは，怒ってはいい知恵も浮かばぬとばかりに父親と飲み続け，酔払った頃合を見計って，次女の恋人である自分の知人を父親に紹介する。それで一件落着，というのが物語のあらましである。[80]

信心深い家族を襲った信心ゆえの不幸を，一家一番の不信心者が機転を利かし，ユーモアの裡に円満解決へ導くという筋立ては，小粒のぴりっとした諷刺の味である。それは無論，この作品が，いずれは若きチェーホフも舞台とする低俗なユーモア雑誌「Осколки（オスコールキ）」に発表されたこと，加えてレスコフ自身『真珠の首飾り』の冒頭長々と述べている，宗教的で面白くて，しかも教訓的おちが

必須の「クリスマス物語」[81] として構想されたことと無関係ではないだろう。それでも，暴露性はオブラートにくるまれているとしても，諷刺に変わりはなく，「『悪魔祓い』と同様『小さな過失』もまた，モスクワの商人階級の迷信的な偽の宗教心に向けられた純粋な諷刺である」[82] と言っていいだろう。

レスコフのインスピレーションが，プルィジョフの作品を触媒としたかどうかは不明である。だが，もしそうだとしても，ここにはプルィジョフやシチェドリンのように攻撃的な調子は今ひとつない。『僧院の人々』『封印された天使』『地の果て』といった作品で，義人を扱う手付きも，ドストエフスキーのように民衆が，宗教がといった思い入れたっぷりである訳ではない。小説家というより物語作者に相似しい彼には，佯狂もまた物語を織るための一本の糸に過ぎないかのようである。

＜7＞　コロレンコ

コロレンコについて詳しく知っている訳ではない。先に引用したパスカルの言に依れば，プルィジョフとともに，彼にはユローヂヴィに関する「研究書（エチュード）」があることになるが，そうした類と思われるもので読んだことがあるのは『イコンを追って』（1887年）だけである。何やら竜頭蛇尾風で気がひけるが，論じる力もないし，作品もルポルタージュといった趣なので（実際は **рассказ** である），ざっと紹介して，この稿を閉じることにしよう。

1887年6月コロレンコは，ニージニー・ノヴゴロトから50キロちょっとの所にあるオランスキー修道院詣の旅に参加した。かつて，毎年の夏にこの修道院からニージニー・ノヴゴロトの町へ「奇跡成就（チユドトヴオールナヤ）」のイコンが運ばれてくる習しがあった。そしてイコンが修道院に持ち帰られる時，町から多くの人々が，イコンにつきそって巡礼の旅に出るのが常であったが，コロレンコは，この巡礼団の一員となった訳である。この旅からの帰還後，時を移さず書かれたのが，『イコンを追って』である。そこには，例えば，日本で言えば狐つきの女性（クリクーシヤ）を通りゆくイコンの下をくぐらせるといった行為や，イコン

による害虫駆除，小児麻痺の治癒の話など，民衆の信仰の有様が描かれている。ユローヂヴィについての言及は，各人に各様の神のお告げがあるという修道院近くに住むある分離派の主張をうけて，新たな信仰の誕生との関連でほんのわずかなされるに過ぎない。

この青年は，ちょっと前に村を全焼させたんだ。まあ，それ以前にも我々の修道院の鐘をとんでもない時間に叩き出したことがあって，その時は叩かしておいたんだが……みんなぞっとさせられたものさ。早い話があいつはユローヂヴィなのさ。どうしてユローヂヴィになったかって言うと，こういうことなんだ。あいつは，あの連中の中じゃ一番の物知りで，連中の儀式（ラヂエーニエ）の時は坊さんのかわりをしていた。「とある時のことなんですがね――とあいつ自身が，正気に帰るとよく言っているんだが――散々ぱら読経し，知恵ふりしぼって説教し，神のことを微に入り細を穿って言ってきかせていたんだ……で疲れてしまったので玄関に出て，風に向かって立って少し頭を冷やしたんだ。夜のことだった。空には星が瞬き，月がでていた。まるで昼間のように明るかった。と突然，森の上空で何かはぜるような音が聞こえたんだ。そっちの方をふりかえると，森の上空を翼をつけた蛇が，この世のものとは思えないくらい大きな蛇が飛んでいて，全身炎にくるまれ，ちょうど頑具のがらがらのような音をたてているんだよ……。あっという間もなかった，蛇は空半分を覆い隠し，まっすぐ僕たちの村を，この僕自身をめがけて，その口をぱっくりあけて……」家の中ではみんながその青年の帰りを待っていたが，一向に帰って来ない。それでみんなが探しに外に出てみると，あいつは，死人のように大の字に倒れていたのさ。それからだよ，正気を失ったのは。正気にかえる時もあるにはある。ほんのちょっとの間だがね……。[83]

語り手の「私」とともにイコンのあとを追いかけて，民衆の間で見聞する事実に感動し，何がしかの真実を見ようとするアンドレイ・イワーノヴィチ。

だが彼は，道連れである「私」が彼と同一の高揚した気分にはないことも，その都度思い知らされる。同じ文明化された町の人間である「私」の実証主義的立場からの視線は，彼に苛立，不安を与えずにはおかない。結局彼は，修道院までの巡礼の旅から，期待したような心からの慰安を得ることのできぬままに，意気阻喪して家路につくことになる。この結末は恐らく，民衆の伝統的世界観が，著しい速度で近代化してきた，そして更なる速度でしつつあるロシヤの中で，益々その後進性を露呈させ，進退きわまった悲劇的状況にある，という永遠のナロードニキ・コロレンコの認識に支えられていよう。この認識は，当然，民衆の生活，思考に対し，時代に即応した変化の必然性を呼びかけずにはおかないだろう。

佯狂がコロレンコにとって何であったか。『イコンを追って』一作だけから判断することは不可能である。そこに，佯狂に関するコロレンコ自身の主張を，たとえ曖昧にでも読みとることはできないからである。それでも，コロレンコ＝健全なヒューマニストにしてモラリストという通説に従い，この作品の結末に上述したような認識の所在を認めるとすれば，彼にとって佯狂とは，民衆の後進性の一翼を担う障害以外の何ものでもなかったのではなかろうか。まして彼の時代に目につく佯狂とは，ここに描かれたような分離派，分派に包摂された形のものか，あるいは物乞いの隠れ蓑といった，いわば佯狂本来の内なる光を求める孤独な求道の姿など雲散霧消してしまった有様でしかなかったとしたら，それは尚更である。

＊　＊　＊　＊　＊

以上，限定的ではあるが，19世紀文学におけるユローヂヴィの形象を概観してきた。

佯狂とは，本質的にパラドキシカルなものであった。そして佯狂を為す者たちのパラドキシカルな存在を許したのは，社会精神の均一質，至高の神に向かって万物は秩序づけられているのだという共通の意識であった。そうし

た共通の意識が前提されていればこそ，ユローヂヴィは，自己完徳という疎外性によって社会を撃つことができたのだし，同時にその疎外性ゆえに社会から排除されることもまたなかったのである。そこでは，神と社会倫理が共存し，宗教と法あるいは国家とがバランスシート上にあり，自己と社会と神が重なっているのである。だから，宗教的な意味での精神の均一性が浸蝕される時，佯狂のパラドクスもまた解体してゆく運命にあった。教会権力が世俗化し，国家権力の中にとりこまれてしまう17世紀後半が，その時期にあたる。以来佯狂は，その内的倫理と社会倫理との紐帯を切断され，内的倫理に誠実であろうとする度合に応じてラヂカルな形態をとり，社会倫理転倒を標傍して分離派，分派にとりこまれていったのであった。かつての紐帯を信じ，単独者であり続けるユローヂヴィの運命はその時，内的倫理に従って抹殺される道を辿るか，あるいはオカルト的な現象に堕してしまうかのいずれかであるだろう。

19世紀――それは，分離派，分派は中央集権制の中で馴馳され，少なくとも都市の路上で演じられる佯狂にしても，もはやオカルト現象以外の何ものでもなくなった時代であった。そうであれば，たとえ佯狂の真の姿がどうであれ，また作家個人の嗜好がどうであれ，19世紀の社会現象としての佯狂が，文学の世界に負の記号を背負って登場するのも当然であろう。肯定的な形象と思われるプーシキンの「鉄の円錐帽子」にしても，彼は史劇の登場人物であり，トルストイの「グリーシャ」にしても旦那衆のいわば頑具でしかないのである（但し，トルストイ，宗教とフォークロアにも精通していたトルストイ，野垂れ死ななければならなかったトルストイには，他にも多くの事例のあることが予想される）。

ここでとりあげた作家中，ユローヂヴィが，真に肯定的な姿で，しかも主要な姿で，しかも主要な形象として機能しているのは，ただドストエフスキーひとりである。ドストエフスキーについては，前述もした通り別の機会に譲らねばならない。その時には，バフチンの次のような言及も十分に考慮されなければならないだろう。

だから，〔地下室の男の――引用者〕言葉は，興奮状態にありながらも，シニカルに強調され，シニカルに計算しつくされているのだ。彼の言葉は佯狂を志向するが，けだし佯狂とは，あたかも正と負が逆転しているかのような記号をもつ独特な形式，独特な美学なのである。[84]

（1988年1月）

〈注〉

① юродивый の訳語については様々である。その件，及びに юродивый の概略については，中村喜和氏の「瘋癲行者覚書」（『言語文化』第6号）を参照のこと。以下拙論に使用する юродивый 関係の文献の多くは，氏の論文中で知ったものである。

② ブロックガウス＝エフロン百科辞典に依れば，затворники（即ち затворничество を為す者）とは，不断の祈りに従事するために，自発的に洞窟あるいは草庵に蟄居し、めったに外出することのないキリスト苦行者であり，また отщельники（即ち отщельничество を為す者）とは，禁欲主義の徹底的実践のために社会を捨てて孤立無援の地に赴いたキリスト教苦行者のことである。

③ И. Ковалевский, Юродство о Христе и Христа ради юродивые Восточной и Русской церкви, М., 1895, с. 136.

④ P. Pascal, Avvakum et les débuts du raskol, Paris, 1963, p. 319.

⑤ Г. Федотов, Святые древней руси, Paris, 1985, с. 193
尚，юродивый と блаженный は同義である。

⑥ Д. Лихачев, А. Панченко, Н. Понырко, Смех в древней, Руси, Л., 1984, с. 79

⑦ 同前，с. 102

⑧ 象徴的読みかえについて Панченко から2～3の例を挙げておこう。
例えば，16世紀に活躍した Василий Блаженный は敬虔で徳高き人の住む家には石を投げつけ，破廉恥な冒瀆行為のなされている家の傍を通る時には，その家の隅々にキスをしたのだが，一見不合理で馬鹿気たこれらの行為はそれぞれ，家の中に入ろうとして入れずに壁にうごめく悪魔を撃退し、同じく入ろうとして入れずに泣いている天使を慰めるという風に読みかえられることになる（前掲書。стр. 103）。また，ウスチュクのプロコーピーの場合，手にした3本の火掻き棒の先端がまっすぐのばされていると豊作で，先端がのばされていないと不作を意味したが，ここでは，「のばされた（простёртые）」火掻き棒と「広範な（пространство）」実り，「のばされていない（непростёртые）」火掻き棒と「狭隘な（непространство）」実りという音声上の相似による読みかえが行なわれているのである（同前。с. 107）。

⑨ Ковалевский（前掲書。c. 135）とПанченко（前掲書。c. 72）は，イサーキーをもってロシヤのユローヂヴィの嚆矢としているが，Федотовは言葉本来の意味でのロシヤ最初のユローヂヴィは，13世紀後半に活躍したウスチュクのプロコーピー（Прокопий Устюжский）だとしている（前掲書。c. 194）。

⑩ Г. Федотов，前掲書，c. 194

⑪ И. Ковалевский，前掲書，c. 61～62.

⑫ 詳細は中村喜和，前掲論文、p. 11～12。

⑬ パンチェンコは実際，佯狂の最盛期は，イワン雷帝時代と教会分裂の時代だったといっている（前掲書，c. 132）。ちなみに彼は，プロテストする単独者たる古典的ユローヂヴィとは，本質的に保守的モラリストであって，中世というゆったりとした変化をとげゆく保守的社会にこそ相似しき存在であり，ちょっとでも著名な活動的ユローヂヴィは誰ひとりニコンの改革をうけ入れず，アヴァクムやアヴァクムと志をひとつにする苦行者のまわりに集ったといい（同前，c. 132），アヴァクム自身と，それにニコンに公然と反目したロシヤ唯一の大主教パーヴェル・コロメンスキーの佯狂についても言及している（同前，c. 133～134）。

⑭ クリュチェフスキーは『ロシヤ史講義』第41講で，フョードル帝について論じ，この皇帝自身が殆どユローヂヴィのようだったといっている。В. Ключевский, Сочинения в 8 томах, т. 3, М., 1957, с. 18～21.

⑮ パンチェンコは，アレクセイ帝が即位してしばらくはどれほど強くユローヂヴィと強く結びついていたかを詳細に述べた後で，後年の彼のユローヂヴィ迫害を念頭におきつつ，そうした事実は宮廷のしきたり，伝統であったのだと結論している（前掲書，c. 138）。パンチェンコはさらに，そのしきたり，伝統が1680年代の西欧化された宮廷においてもその意義を失なっていなかったとも結論している（同前、c. 145）。

⑯ 1730年に即位したアンナ女帝がユローヂヴィ取締りの勅令を出す一方，その女帝の母フラスコーヴィヤ・フョードロヴナは，ユローヂヴィを自らの屋敷に庇護していたという（Панченко，前掲者，c. 152～153）。

⑰ コワレフスキーは，文献がないので何とも言えないと断わった上で，偽の佯狂が16世紀以前に既に存在したことは十分にありうると仮定する一方，イワン雷帝の書簡，ヨアサフ総生教の1636年と1646年の勅令，1722年と1732年の宗務院の勅令を援用して，偽ユローヂヴィの続出を追認し，遂には，敬虔の名を騙って民衆の宗教心を悪用する寄食者たる同時代の偽ユローヂヴィの多さを嘆いている（前掲書，c. 150～156）。だが，本物のユローヂヴィの孤独な精進の姿を目にすることがない以上，一見して奇矯な振舞を行う者の真贋を見極めえようか。「偽」というレッテルは，権力側の弾圧にとっては必要なレッテルであったとしても，本質的に真贋の識別の不可能な民衆にとってはさしたる意味をもちえなかったのではなかろうか。ただいずれにしても，16世紀の後半に教会が世俗権力に屈服し，佯狂の能動的側面が強調されていったことの反動として，あるいはまた分離派に合流したユローヂヴィたち，あるいは佯狂を称揚した分離派の闘士たちは，佯狂

を何よりも批判の武器・戦略として用いていったために，佯狂の苦行としての本来的意味を担う受身的側面がないがしろにされ，ユローヂヴィの質的低下が進行していった，そしてそこに偽ユローヂヴィたちのつけこむ間隙が広がっていった，ということは十分ありうるプロセスのように思われる。

⑱ P. Pascal, La religion du peuple russe, Lausanne, 1973, q. 55～56

⑲ Пушкин, Полное собрание сочинений, т. 7, Bibliography Reprint-Tokyo, 1984, с. 77～78.

⑳ Пушкин, Полное собрание сочинений, 前掲書, с. 464

㉑ В. Ключевский, Сочинения в 8 томах, т. 3, М., 1957, с. 19..

㉒ Л. Толстой, Полное собрание сочинений, т. 1, Kraus reprint, Nendeln/Liechtenstein, 1972, с. 17.

㉓ 同前, с. 19.

㉔ 同前, с. 19～20.

㉕ 同前, с. 35.

㉖ Л. Толстой, Полное собрание сочинений, т. 2, Kraus repint, Nendeln/Liechtenstein, 1972, с. 139～140

㉗ 同前, с. 152.

㉘ 同前, с. 152.

㉙ 同前, с. 150.

㉚ 同前, с. 152.

㉛ 同前, с. 151.

㉜ 同前, с. 113.

㉝ 同前, с. 113.

㉞ 拙論，「永遠の失敗者——イワン・ガヴリロヴィチ・フルィジョフ略伝」，「文化と言語」vol. 19, No. 1.

㉟ 同前, p. 49

㊱ И. Г. Прыжов. Очерки, статьи, письма. М. Л., 1934（以下 Прыжов. О. С. П. と略記）の М. Альтман の作成したビブリオに依れば，論文名，発表年度は以下の通りである（但し関係分のみ）。

1860年 ㋑ Иван Яковлевич, лжепророк.（〈Наше время〉, No.34）

㋺ Житие Ивана Яковлевича, известного пророка в Москве.（単行本）

1861年 ㋑ Московские юродивые（〈Северная пчела〉, No. 125）

㋺ Нечто о воронежских пустосвятах и юродивых（〈Воронежская беседа〉）

1862年 ㋑ Юродственное племя（〈Развлечение〉, No. 4, 13, 14, 31, 46, 48）

㋺ Юродство в Москве（〈Московские ведомости〉, No. 156）

㋩ Сказание о кончине и погребении московских юродивых Семена Митрича и Ивана Яковлевича（単行本）

1863年 ㋑ Юродственное племя（〈Развлечение〉, No. 35）

1865年 ㋑ Углицкие юродивые и предсказатели (〈СПб. ведомости〉, No. 34)

㋺ 26 московских юродивых, пророков, дур и дураков (〈Развлечеиие〉, No. 12)

㋩ 26 московских лже-пророков, лже-юродивых, дур и дураков. (単行本).

ビブリオを挙げたのは，本稿で使用する Прыжов. О. С. П. では1865年㋩のタイトルの下に，イワン・ヤーコヴレヴィチ以下28人のユローヂヴィが登場してくるためである。以上の文献すべては未見のため，何とも言えないが，もともと1865㋩がそうしにものなのか，О. С. П. の編者の作為によるのかはさておくとしても，О. С. П. に1865年㋩として収められている論文は，1865年㋺に1860年㋩や1862年㋩といったものが付加されたものだと考えねばならない。つまり「26人」とは，恐らく，イワン・ヤーコヴレヴィチとセミョーン・ミトリチを除いた人数のことなのではあるまいか（もっともその「26人」中に「モスクワ」とは縁のないユローヂヴィも含まれているのだが)。ちなみにプルィジョフのこの著作については，既に中村喜和氏の紹介がなされている（「一橋論叢」，第76巻，第3号，p. 104～106)。

㊲ Прыжов. О. С. П. с. 17.

㊳ 同前，с. 35.

㊴ 同前，с. 42.

㊵ 同前，с. 44.

㊶ 名簿は次の通り.

1. Семен Митрич 2. Данилушка Коломенский 3. Макарьевна*
4. Мандрыга 5. Николаша-дурачок 6. Матюша
7. Евдокия Тамбовская* 8. Ксенофонт Пехорский
9. Феодосий 10. Петр Устюжский
11. Отец Гавриил Афонский 12. Маша Бускинская*
13. Отец Андрей 14. Иван Степаныч
15～16. Татьяна Степановна Босоножка* и Филиппушка
17. Марья Ивановна Скачкова* 18. Агаша*
19. Марфа Герасимовна* 20. Иваи Степаныч
21. Кирюша. 22. Никанор. 23. Антонушка.
24. Кирюша (второй). 25. Федор. 26. Отец Серафим.
27. Бородатый мужик. (＊印は女性。22番以降はモスクワではなく，ヴォロネシのユローヂヴィ。尚21番目の「キリューシャ」はトルストイの『幼年時代』でも登場している。注㉔及び，注㉔を施した引用文参照のこと)

㊷ В. Базанов, Русские революционные демократы и народознание, Л., 1974, с. 404.

㊸ М. Альтмаи, Иваи Гаврилович Прыжов.
〈Каторча и ссылка〉 кн. 6, М., 1932, с. 60.

㊹ Прыжов. О. С. П. с. 83～86.

㊺ С. Макашин, Салтыков-Шедрин, Биография 1, М., 1951, с. 47. 尚，シチェドリンについては，本学教授相馬守胤氏に色々御教授いただいた。

㊻ М. Е. Салтыков-Шедрин, Собрание сочинений в 20 томах, т. 17, М., 1975, с. 17～18.

㊼ 同前，с. 18.

㊽ М. Е. Салтыков-Шедрин, Собрание сочинений в 20 томах, т. 2, М., 1965, с. 251～273.

㊾ 同前，с. 536.

㊿ М. Е. Салтыков-Щедрин, Собрание сочинений в 20 томах, т. 8, М., 1969, с. 290.

(51) 同前，с. 322.

(52) 同前，с. 322.

(53) 同前，с. 325.

(54) 同前，с. 386～387.——ちなみに，とりわけアクシーシユシカのセリフは，語呂あわせ，あるいは踏韻が巧みにおりこまれており，典型的佯狂言語となっているので是非原文を参照願いたい。

(55) 同前，с. 582.

(56) パラモーシャがグルスチーロフに発する言葉——『働かざればパンもなし！(Без працы не бенды кололацы!)』——は，プルイジョフの『イワン・ヤーコヴレヴィチの生涯』中に紹介されているイワン直筆の書付のひとつである。この言葉は，そこでは，20年以上文通したさる女性の「xは結婚するでしょうか，しないでしょうか？」との間に対する答となっている（Прыжов. О. С. П. с. 37. 参照。(また，アクシーシユシカは，乞食に施しをするよう説いて，施しをしない者に対しては，唾を吐いて知らんふりをするが，(Щедрин, т. 8, с. 395)，『26人の……』においてエヴドーキヤは，路上で見さかいなく施しを乞い，くれない人には悪口雑言を投げつけ脅したと書かれている（Прыжов. О. С. П. с. 54）。ところで，パラモーシャ（＝イワン・ヤーコヴレヴィチ）の言葉を，双方の作品の注に従って訳しておいたが，正しいのだろうか？本当にこれはポーランドの諺に由来しているのだろうか？（Салтыков-Щедрин, т. 8, стр. 582. Прыжов. О. С. П. с. 37. 参照）とはいえ結局の所，「ことの成就，成功，幸福な結果，何か鐘の音のように喜ばしくも荘厳なもの」（А Волынский, Кололацы, Забытое слово, 〈Северный вестник〉, 1894, с. 812, с. 87）を意味する筈の〈Кололацы〉が，不合理な中味のない言辞の象徴として，1860年代のジャーナリズムで盛んに使用されたのは皮肉と言えると同時に（Волынский もまた否定的意味で論じている），イワン・ヤーコヴレヴィチ現象の大きさを示してもいよう。

(57) С. Макашин, Салтыков-Щедрин на рубеже 1850～1860 годов, М., 1972, с. 157.

(58) グロスマン，『ドストエフスキーの蔵書』，中村健之介訳，日本ドストエフスキ

ー協会資料センター，1973，p. 35.

⑤⑨ ドストエフスキーの1879年8月7(19)日付リュビーモフ宛書簡（Достоевский, Письма в 4 томах, т. 4, М., 1959, с. 92.）

⑥⓪ Сказание о странствии и путешествии по России, Молдавии, Турции и Святой Земле постриженника Святой Афонской инока Парфения, М., 1856, 2 изд., ч. 1, с. 284～285.

⑥① 拙論，「永遠の失敗者——イワン・ガヴリロヴィチ・プルィジョフ略伝」，「文化と言語」vol. 19, No. 1.

⑥② Ф. М. Достоевский, Полное собрание сочиненний в 30 томах, т. 10, Л., 1974, с. 249.（以下ドストエフスキーからの引用はこの全集に依るので巻数・頁数のみを示し，Дос, т. 10, с. 249 という風に略記する）

⑥③ 同上，с. 254.

⑥④ М. Альтман, Прыжов и Достоевский, 〈Каторга и Ссылка〉, кн. 8～9, М., 1931, с. 69.

М. Альтман, Достоевский. По вехам имен, Саратов, 1975, с. 101.

⑥⑤ Прыжов. О. С. П. с. 44.

⑥⑥ 同上，с. 35.

⑥⑦ ワシーリーⅢ世の時代，ある時モスクワに箒をもった聖なる愚者（ブラジェンヌイ）が現れ，どうして箒をもっているかを尋ねられると，「国家はまだ完全にきれいになってはいない。今こそ最後のゴミを一掃する時だ」と答えたとされる。В. Ключевский, Сочинения в 8 томах, т. 2, М., 1957, с. 113.

⑥⑧ Дос, т. 10, с. 256. Прыжов. О. С. П. с. 33.

⑥⑨ Дос, т. 10, с. 260. Прыжов. О. С. П. с. 36.

⑦⓪ Дос. т. 10, с. 257.

⑦① 前掲書（注⑥⓪），ч. 1, с. 284～285.

⑦② Дос, т. 11, с. 235.

⑦③ Воспоминания Андрея Михаиловича Достоевского, Л., 1930, с. 62～63. 但し，ここに言及されているのは，アグラフェーナという女性。

⑦④ Дос, т. 8, с. 14.

⑦⑤ 拙論「模倣とムィシキン——『白痴』の世界」，「文集『ドストエフスキイ』」第2号，p. 62～90.

⑦⑥ Дос, т. 14, с. 20.

⑦⑦ 同前，с. 5.

⑦⑧ 同前，с. 6.

⑦⑨ ユローヂワヤ（юродивая）については，それを系譜的に辿った論考があるので参照願いたい——安藤厚「ドストエフスキイの小説における〈聖なる白痴女（ユローシヴィヤ）〉の系譜——『未成年』の創作ノートを出発点として」，「文集『ドストエフスキイ』」第1号，p. 114～132. 及び，安藤厚「ドストエフスキイの小説における〈聖なる白痴女〉の系譜（補遺）」，「文集『ドストエフスキイ』」第2号，p. 118～129.

⑧⓪ Н. С. Лесков, Собрание сочинений в 11 томах, т. 7, М., 1958, с. 252～258.

⑧① 同上，с. 433.

⑧② H. Mclean, Nikolai Leskov. The man and his art, Harvard U. P., 1977, p. 383.

⑧③ В. Г. Короленко, Собрание сочинений в 6 томах, т. 3, М., 1971, с. 52～53.

⑧④ М. Бахтин, Проблемы поэтики Достоевского, М., 1979, с. 269. 尚，この部分については，新谷敬三郎氏が『白痴』のムイシキンとの絡みで引用し，論じてもいる（『『白痴』を読む』，白水社，p. 220)。